

不登校大学生にとっての健康相談室の意味づけに関する研究

1130518 吉永 智也

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

小中高の保健室が生徒にとってどのような意味づけがあるかについての研究はあるが、大学の健康相談室に関する研究は少ない。本研究は不登校大学生にとって健康相談室がどのような場所なのかということをX大学の健康相談室職員と、同相談室を頻繁に活用していた不登校学生にインタビューを行い研究したものである。結果としては、対人恐怖症や大学に精神的な居場所のない孤独感という理由で不登校となる学生にとって、健康相談室とは見守ってくれる人（職員）がいるという安心感、並びに、そこを媒介として間接的ながらも他学生との人間関係を構築出来ることによる喜びを味わえるという場であることがわかった。

2. 背景

大学の健康相談室とは、学生のための福利厚生のひとつであり、その業務内容は学生の健康に関する諸問題等の全般にわたっている。具体的には、健康相談・定期健康診断の実施・必要に応じ可能な範囲での応急処置・投薬、心理相談を行っている。その他、医療機関などの紹介や学生の課外活動のための救急箱の貸し出し等も行っている（工学院大学健康相談室ホームページより）。

スタッフ構成は、求人サイトや約10校のホームページを見た結果、女性で、保健師、看護師の資格をもつ人が多く勤務している。

小中高の保健室が生徒にとってどのような意味づけがあるかについての研究はあるが、大学の健康相談室に関する研究は少ない。

3. 先行研究

酒井（2005）によると、保健室への来室理由は実に多様であり、頻回来室者にとっての保健室の意味は、プラスイメージ空間、ピア空間、リセット空間、学び舎へと深まると考えられた。なお、これらの保健室の意味は、近家庭空間に包含されると考えられた。

この研究により、頻回来室者に対して養護教諭は安定性、グッドリスナー、理解者、自己開示の呼び水、羅針盤、つまり、給水所としての養護教諭としての役割を果たしていることが明らかとなった。

小中高の保健室が生徒にとってどのような意味づけがあるかについての研究はあるが、大学の健康相談室に関する研究は少ない。

4. 研究の目的

不登校大学生が健康相談室をどう意味づけているのかを明らかにすることを目的とする。

5. 研究の方法

調査対象として、X大学勤務の健康相談室職員Aさんと同相談室を頻繁に活用していた不登校学生Bさんの二人に対して同時に聞き取り調査を行った。

Aさん（40代女性）に対してはこれまでの略歴とX大学の健康相談室に就職するに至った経緯と学生Bさんとの5年間の関わりに関する経緯、Bさんに対しては不登校になった経緯とA氏との関わった5年間の経緯をインタビューした。

6. 研究結果

(1) Aさんの略歴は次のようなものである。

- 高知県にて生まれる
- 看護師免許取得（県外）
- 某大学附属病院勤務（県外）
- 某企業立病院勤務（県外）
- 高知県内病院勤務
- X大学勤務（現在に至っている）

(2) Bさんの略歴は次のようなものである。

- 2011年 X大学入学。
- 2013年 不登校に陥る。

取得単位は下記のようになっている。

- 1年目 40単位

- ・2年目 36単位
- ・3年目 4単位
- ・4年目 0単位

2年目までは順調に単位を取られていましたが、その後留年されている。

(3) インタビュー結果

・Aさんが学生相談にのる際の姿勢に関してインタビュー結果から引用して紹介する。

A (職員) 恋愛も含めて。心理相談になると自分がいままで生きてきた中の、経験とか情報とかそういうのになりますよね。(中略)
A (職員) その子にとって一番いいのはなにかなあとはよく考えますが、けど、二十歳前後でねえ。それはもうなんて言うんですかこの二十歳前後の子のその物事に、これから社会にでて活躍する人達の本当に通過点のひとつ。ね?あたしからしたら、40過ぎたおばさんからしたらそんなただの通過点のひとつの出来事。だから学生にとってはそれが本当に一大事のように。爆弾が落ちてきたかのようにいうけど、けどただの本当にエピソード。もう何年かしたら絶対笑い話になるからあとは言ってるんですけどね。
B (学生) でも後で考えたらそうながやけど、その当時はそうよ。
A (職員) そうそう。その時は本当にもうね。世界中の不幸が私にきましたみたいな。本当に。ねえ。不幸のヒロイン。不幸のヒロインなるんやけど、けどそれはただの人生の中の通過点のなかの一つの出来事。

以上の発言から心理相談になると自分の人生経験をもとに相談にのっているようである。

このような姿勢で学生相談にのるAさんですが、Aさんにどのような悩み相談が多いのかというと、グループワーク授業に関するものである。

グループワーク授業が学生にとってどのような悩みになっているかをインタビュー中から紹介する。

C (聞き手) メンタル面っていうと例えば、どういう類いの悩みごとがあるんですかねえ?例えば。
A (職員) 例えば、授業、授業のグループワークですね。グループワーク。先生けど今多いです。いま。高校までは受

け身の授業ねえ。大学入ったらそういうグループワークとかねえ。
C (聞き手) そういう子多いんですか?
A (職員) 多いです、もう、そんなんしたくないって。(中略)
A (職員) グループ組んでくださいって言ったらみんな、仲良しこよしで組むじゃないですか。どうしてもあふれるやないですか。そうになったらどうしたらいいってなりますよね。でっ先生方はそこまでねえ、小学生、中学生でもないから溢れたもの同士どうぞくっついてやりなさいとかそこまでは面倒みんなやないですか。もうそれが、嫌なんですって。そうやって溢れてるっていうのを同級生からこうやって見られるだけで嫌なんですって。
B (学生) あの、凄いわかるかも。
A (職員) そうでしょ。わかるでしょ?
B (学生) この年になったら気にならんけど、10代の子らは傷つくと思う。プライドがあるき。
A (職員) そう。それを見られたくないよね。本当に繊細なんです。それやったらもう、出席番号順に何番から何番までグループを組みなさいって強制的にやってあげたほうがその子達は楽ですよ。本当に。まだ気が楽。
B (学生) でもなんか年々増えてますよね?グループワークなんでかね。

このようなAさんが、もう一人の対象者Bさんとどのような関わりかたをしていたのかを紹介する。

C (聞き手) 振り返るとどんな学生なんですかね?
A (職員) 振り返るとですか?いや8年間よくがんばったなーと関心します。1回も休学せず。
B (学生) ありがとうございます。
A (職員) なんか、不登校になってもなんか途切れずにまたきはじめるやないですか?そこはやっぱり彼の凄腕所。諦めずにねー。
C (聞き手) それは他の子と比べると違うんですかね?
A (職員) やっぱり違うがやないですか?(中略)
C (聞き手) そこにその、ねえこっちがどういう風にそれをうまくこうひきだしたんですかね?

A (職員) 私とくにしてなくて、とりあえずあの、メールとか電話でね、まあ出席状況見て、あっ来てないと思ったらメールしておはようから始まって、メール電話して、で、大学へ来たら必ずここへ寄ってねって。とにかく大学での居場所ってのを確保。(中略)

C (聞き手) ただ、おはようってメール送るとどんな返事かえってくるんですか？

A (職員) いま、授業でてます。

B (学生) そうそうそうそう。授業中にいっぱい超鬼電されて

A (職員) 授業中に何度も電話したりしてね。出てますけどーみたいな。けど着信履歴みて、あの、お昼休みにね、なんか、お昼にねえ電話してきたりも。ちゃんところ反応があるんですよ。Bさん。無視じゃなくてきちんと反応してくれたので、それは安心。安心ねえ？車で通学してくるから道中慌ててきよってね、なんかあっても困る。(中略)

A (職員) その勉強の中身はわたしにはわからないけど生活リズムを崩さないようにっていうのは日頃から言ってきました。でっ夜のバイトも辞めたしね。うん。

このようなやりとりをしていたAさんBさんの互いへの気持ちは次のようなものだった。

C (聞き手) 卒業もうまくいけばもうそろそろで、あのね、もうなんとか見えてくる所にきつつあるわけだけでも、その大学生活の中で、このどういう存在だったのか？

B (学生) 本当になんかありがたいございましたとしか言えない。でも、ほんとここまでやってこれたのは元室長はじめ、ほんとに皆さんのおかげです。なにやろ。なんか忙しいと思うんですけど、その朝とか連絡してくれたのは凄く嬉しかったです。ほんとに。やきこれからもがんばってください。本当にありがとうございました。

A (職員) いえいえ。もうね、卒業証書をもろうたら涙がでる。

B (学生) でないでしょ？一粒もでないでしょ。

A (職員) ねえ。値打ちのある卒業証書になったね。本当に。

B (学生) ほんとお疲れさまでした。Aさんも。

A (職員) いえいえ。

C (聞き手) まあ、そのメールの話でいうとまあちよつといらっとする時もあるけどもなんかそれが後から振り返るところ嬉しいみたいな。

以上のBさんのような不登校学生にとって健康相談室とはどのような場所なのかというと、健康相談室は不登校学生にとっての居場所である。それをインタビューから引用して紹介する。

C (聞き手) Bさんにとってはこの健康相談室もしくはAさん、まあ心理カウンセラーの先生も含めてこういう体制というのは、いままで8年間大学生活をおくってくるなかでどのような存在として位置づけられているのか？

B (学生) なのでしょう。でもやっぱりちよつと息抜きのか場といますか、先ほどおっしゃってたように、やっぱりせつかく学校来て誰とも話さず帰るのもなんかちよつと。

C (聞き手) ああ。

B (学生) 個人的には嫌じゃないですか。やき、ちよつとなんか報告して帰るみたいな。本当は多分ねえ病気の人が怪我した人の場所なんですけど、やけどなにやろう居場所のない子の居場所みたいな感じじゃないですかね。個人的には。

C (聞き手) その居場所っていうのは物理的な居場所なのか、精神的な居場所なのかっていったらどっちなのかしら？

B (学生) 僕、個人的には精神的にです。(中略)

B (学生) 居場所作りって多分これからの大学に大事じゃない？

A (職員) そう。

B (学生) 結局空き時間がね。

A (職員) 過ごす場所がない。

B (学生) そうそう。大事。うん。結局人って他と比べてしまうきあれだけぎゃーぎゃーぎゃー騒がれたらそら落ち込む。とくに向こうは。

C (聞き手) えっ人が騒いでるのみると落ち込むというのはどういうことなんですかね？

B (学生) やき、なにやる。なんかその、やかましいってのでもいららくるっていうのもあるけど逆にうらやましいんですよね。うん。なんか、ああいうドラマみたいな大学生活。うん。

A (職員) 皆でね、ギャーギャーわいわい本当に元気いっぱいなのじゃわじゃした大学生っていう。

B (学生) そう。文句いいながらも多分うらやましいがですよね。みんなね

このように不登校学生にとって居場所という側面があることがわかったが、それだけではなく健康相談室という人と人の橋渡しの場所であることもわかった。

A (職員) 近所の世話好きのおばちゃんが地域の子供達を見守ってるような。(中略)

C (聞き手) 見守り役の人になにをしてもらおう場所なの？

B (学生) 僕は、話を聞いてもらうというか、

A (職員) その、日常、あの、生活で、あの、まあそういう出来事とかを話してもらって、その中で私がこうこの方のあの学生のあの、まあ不安に思ってることか、悩みとか、なんかこう困ってることとかそういうちょっと気づいて欲しいっていう、なんかそういうサインもあつたんじゃないかなって思うんですけど。

C (聞き手) サイン？

A (職員) サインというかこうちょっと対人関係で困ってる、あのはっきりこんな相談がありますとかって言わないタイプなので、でちょっと困ってることとか、あのね、テストのあの持込のレポートが欲しいときになんかこう遠まわしにちょっと気づいてほしい。で誰かにコピーさせて欲しいとかそういうのを。気づいて欲しいっていうのがあつたんじゃないかなって。それがきっかけでこう何回もきはじめてんじゃない？そうではない？

B (学生) そうかもしれないです。そうです。(中略)

A (職員) あの、学生と学生の間に入ってちょっと、あの、ちょっとこう橋渡しじゃないけど、本来は自分から直接言うのが一番いいんですけど、言えないので、そういうときに、あの、直接仲間の支援っていうのが受けられないので、ちょっ

と私が間に入ってワンクッション置いて、他の学生にちょっと困ってる学生がいるから協力してもらえない？とか。

B (学生) そう。

このように相談室は困っている学生達をつないでいる機能があることがわかった。しかし、それは単に学生の困っている点を解決するというだけではないのである。

A (職員) あの、他の学生が来てるときに、その、私だけの意見じゃなくて、あの、なんとか君こういうケースどう思う？とか、そういうちょっと同世代のアドバイスも貰えるかなと。そういう所でもありますよね。このフリースペースに集まる学生達に。(中略)

A (職員) だいたいまあ、だいたいあの、会話の中でこの方がだいたい4年生っていうのは皆知ってる感じね？でっこう聞かれたときに私にはちょっとわからないってときはそういう学生に、ねえねえこんなんどう思う？とか、ちょっと意見をもらおう。

C (聞き手) とすると、たんにあのなんかこう困っているからつないでくれるいうだけではなしに、じゃあその人と助け合ってるという感覚を持つことが出来るってことか？

B (学生) ああ、でもたしかにそれはそうかもしれないです。(中略)

A (職員) それが逆のときもあるんですよ。こっちがちょっとあれがわからないとかね、どうしたらいいかなってときに、こっちの経験上、こういうときはって。

C (聞き手) そこでまたねえ、この人に、人に対して人助けが出来たというそのことで、まあ言ってみれば存在、自分の存在が肯定されたような感覚も獲得できると？

A (職員) そうそう。

B (学生) あっそれはそうですね。

以上のインタビュー調査の結果から、対人恐怖症や大学に精神的な居場所のない孤独感という理由で不登校となる学生にとって、健康相談室とは見守ってくれる人(職員)がいるという安心感、並びに、そこを媒体として間接的ながらも他学生との人間関係を構築出来ることによる喜びを味わえるという場である。

このような場を健康相談室の職員が提供出来るのは病院で看護師として培った、部門間を連携させる能力、並びに、小

さい裁量を最大限活用するという能力や特徴を職員が持っているからである。(なお、この部分については紙面の都合上、根拠となった発言は割愛した。)

7. まとめ

中学校保健室の研究では、頻回来室者に対して養護教諭は安定性、グッドリスナー、理解者、自己開示の呼び水、羅針盤、つまり、給水所としての養護教諭としての役割を果たしているという結果を出しているが、本研究では、たしかに大学の相談室は居場所の機能を持ち、給水所としての中学校保健室と類似している。しかし、職員を媒介とした人と人との橋渡しの機能を持ち、自己肯定感をあたえてくれる場もある。

ここに、中学校保健室と大学の相談室の決定的な違いがある。

参考文献

1 酒井 都仁子、岡田 加奈子、塚越 潤 (2005) 『中学校保健室頻回来室者にとっての保険室の意味深まりプロセスおよびその影響要因』学校保健研究 47 : 321-353

2 工学院大学健康相談室

<http://www.kogakuin.ac.jp/facilities/health/>